

長野県更埴市

屋代遺跡群・更埴条里水田址
詳細分布調査報告書

1988

更埴市教育委員会

序

この度詳細分布調査を実施いたしました屋代遺跡群は、古くからその存在が知られる大遺跡で、善光寺平初の学術調査が行われた城ノ内遺跡など、学術上極めて重要な遺跡が含まれており、また更埴条里水田址は、全国に先駆け条里的水田址の調査が実施された所であり、その重要性は周知の所であります。

中央自動車道長野線を始め、高速自動車道・新幹線の遺跡横断が計画されており、これに伴う工場建設も急速に進み、遺跡を取り巻く環境は急変するものと思われます。こうした状況の中で、埋蔵文化財をいかに保護していくかは、私共、文化財保護機関の大きな問題となっています。今回の分布調査は、今後の保護施策策定の資料を得るためにものであり、調査結果を基に埋蔵文化財を守り、後世に伝えていくよう精一杯努力する覚悟であります。

無事調査を終了することができ、調査に御理解、御協力いただいた地主の方々、作業に貢献的に御協力いただいた作業員のみなさんに心から御礼申し上げます。

昭和63年3月31日

更埴市教育委員会教育長

安藤 敏

例　　言

1 本報告書は、昭和62年度に国・県補助事業として実施した詳細分布調査の報告書である。

2 分布調査は、昭和62年7月6日～同年7月25日と昭和62年11月30日～12月9日の2回に分けて実施した。

3 本調査は、更埴市教育委員会が実施した。調査組織は下記のとおりである。

事務局 教育長 安藤 敏

社会教育課長 武井 豊茂

社会教育係長 山崎 文夫

社会教育係 矢島 宏雄

" 佐藤 信之

参加者 青木 美知子 市川 晴雄 牛沢 一子

春日 幸枝 久保 啓子 小林 昌子

小林 芳白 坂口 城子 高野 貞子

田中 富子 田中 宣子 羽場 静子

村山 豊

目　　次

序

例言 目次

I 調査に至る経過と概要……………1

II 遺跡の環境……………2

III トレンチと出土遺物……………4

1 おもなトレンチと出土遺物……………4

2 その他の出土遺物……………14

IV まとめ……………17

V プラント・オパール分析調査報告……………19

VI 写真図版……………21

I 調査に至る経過と概要

松本より北上を進める中央自動車道長野線は、更地インターまでの開通が昭和67年と計画され、また関越自動車道上越線、北陸新幹線の屋代地縦横断が予想されている。そうした中にあって、当該地は更地インターに近く、しかもその一部は更地市の工業専用地域・工業地域に含まれていることから、昭和50年代後半より始まった開発が今後急速に進むものと思われる。そこで昭和62年度事業として遺跡詳細分布調査の国庫補助申請を行い、調査費用3,000,000円(国庫1,500,000円、県費450,000円市費1,050,000円)で調査を実施した。

調査は湧水等の関係から7月と11・12月に分けて行い、屋代遺跡群が存在する自然堤防を中心として、東西1.6km、南北0.6km内にトレンチ44ヶ所を設定し、水田部分を除き手掘りで掘り下げた。水田址については、肉眼による土層観察と共にプラント・オバール分析調査を行い、検出に務めた。現地での調査は、地主を始め関係者の協力により12月9日無事終了できた。

調査日誌

7月6日	小雨の中3トレンチより作業開始
7月7日	3トレンチより弥生中期の住居址検出
7月14日	16トレンチより土器多量に出土
7月16日	重機により掘り下げ行う
7月22日	19トレンチより住居址3棟検出
7月25日	出水のため一部調査ができない部分もあったが夏場の調査終了
11月30日	夏場に調査できなかった部分から調査を開始
12月1日	重機により水田部分調査
12月2日	雪により作業中止雪の日多くなる
12月3日	プラント・オバール分析調査
12月5日	25トレンチより弥生式土器出土
12月9日	雨の中埋もどし現場作業完了



第1図 調査地全景

II 遺跡の環境

善光寺平に入りその流れを大きく東へと変え、流れを緩やかとする千曲川の両岸には、広大な自然堤防が形成されている。また自然堤防の後背地には低湿地が見られ、古くから水田として利用してきた。長野市となる左岸には塙崎遺跡群・篠ノ井遺跡群が、右岸には屋代遺跡群がそれぞれ自然堤防上に展開しており、いずれも善光寺平屈指の大遺跡群となっている。

屋代遺跡群は古くからその存在が知られ、昭和8年旧制屋代中学校プール建設の際には、緑地の水注を始め、多数の遺物が出土している。昭和32年から35年には、東京教育大学の岩崎卓也氏らにより城ノ内遺跡の発掘調査が行われ、南関東の編年から脱却したいわば善光寺平の編年ともいうべき、6つの様式が設定された。昭和36年から39年には、耕地整理事業に先立ち、長野県教育委員会によって県下初の条里的水田址の発掘調査が実施された。調査により、自然堤防の後背湿地における条里的地割の広がりが究明され、坪内における地割が「長地・半折折衷型」となっている点などが明らかとされ、条里遺構の年代は10世紀ごろと理解された。その後昭和44年にはは場整備に伴い、下条・灰塚遺跡の調査が行われた。昭和59年から62年にかけ、星代高等学校の大規模な改築工事が実施され、集落址から水田址に至る馬口遺跡の約5,000m²が調査された。また隣接する北中原遺跡では、昭和61・62年に市営住宅屋代団地の改築に伴い、水田址約1,000m²が調査された。この他に、昭和58年以降急速に進む開発事業等により、試掘調査・立会調査が10箇所で実施されており、今後さらに開発の速度は速まるものと思われる。



第2図 位置図

調查據據 (1 : 50,000)

星代遺跡群・更埴条里水田址発掘調査一覧表

年 代	遺 跡 名	時 代	付 図 番 号	備 考 ・ 文 獻
昭和8年	馬口遺跡	平安	1	ブル建設の際土器出土
昭和32年7月～35年8月	城ノ内遺跡	繩文～平安	2	更埴市教育委員会 1961 城ノ内
昭和37年2月～39年12月	更埴条里水田址	奈良～平安	3	長野県教育委員会 1968 地下に発見された更埴条里遺構の研究
昭和43年4月～43年5月	城ノ内遺跡		4	佐沢浩也 1969 更埴市城ノ内遺跡 信濃考古27
昭和43年11月	大塚遺跡	平安	5	岡田正彦 1970 長野県更埴市星代大塚遺跡測量報告 信濃第22巻第4号
昭和44年1月～44年3月	下条・灰塚遺跡	弥生～平安	6・7	更埴市教育委員会 1971 下条・灰塚
昭和44年3月～44年8月	生仁遺跡	繩文～平安	8	更埴市教育委員会 1969 生仁
昭和45年4月	馬口遺跡	平安	9	岡田正彦 1971 長野県更埴市馬口遺跡測量報告 信濃第23巻第5号
昭和45年2月～45年5月	町田遺跡	古墳～平安	10	岩崎卓也 1971 町田II遺跡 長野県考古学会誌10
昭和46年6月	城ノ内遺跡		11	
昭和51年12月～52年6月	馬口遺跡	奈良～平安	12	
昭和53年8月	馬口遺跡	奈良～平安	13	更埴市教育委員会 1978 星代馬口K
昭和55年8月	大塊遺跡	奈良～平安	14	試掘調査
昭和57年8月	馬口遺跡	奈良～平安	15	
昭和58年4月	星河原遺跡	平安	16	試掘調査
昭和58年7月	大塊遺跡	平安	17	試掘調査(水田址)
昭和58年11月	大宮遺跡	弥生中期～平安	18	更埴市教育委員会 1984 大宮遺跡
昭和59年5月	松ヶ崎遺跡	平安	19	立会調査
昭和59年6月	生仁遺跡	弥生～平安	20	立会調査
昭和59年12月	竜王遺跡	平安	21	試掘調査(水田址)
昭和60年3月	松ヶ崎遺跡	古墳～平安	22	立会調査
昭和60年5月	馬口遺跡	奈良～平安	23	更埴市教育委員会 1986 馬口遺跡
昭和60年11月	竜王・星河原遺跡	平安	24・25	試掘調査(水田址)
昭和61年3月	一丁目遺跡		26	遺跡なし
昭和61年4月	星河原遺跡	平安	27	試掘調査(水田址)
昭和61年5月～6月	北中原遺跡	奈良～平安	28	更埴市教育委員会 1987 北中原遺跡
昭和61年5月～7月	馬口遺跡	奈良～平安	29	更埴市教育委員会 1987 馬口遺跡II
昭和62年4月	北野遺跡		30	遺跡なし
昭和62年2月	大塊遺跡	平安	31	
昭和62年5月	北中原遺跡	奈良～平安	32	
昭和62年9月	大塊遺跡	古墳～平安	33	
昭和62年10月～62年11月	馬口遺跡	平安	34	

*付図番号は、付図に赤字で示した調査地点を表わす

III トレンチと出土遺物

今回の詳細分布調査では、水田址と想定される部分に13ヶ所、自然堤防上の集落址と思われる部分に31ヶ所、計44ヶ所のトレンチを遺跡の広がり・性格が把握できるよう考慮して設定した。この内、何らかの遺構あるいは水田土壤が確認されたトレンチは38ヶ所であり、肉眼では遺跡と認めることができなかったトレンチは23・24・32・34・37・40の6トレンチにすぎない。

住居址の多くは自然堤防の北寄りから検出されており、それは自然堤防北側の縁辺部にまで及んでいる。いずれのトレンチも黄褐色粘質土まで掘り下げるとき遺構の検出は比較的容易であったが、その上層となる暗褐色土中の遺構検出は、カマドなどがない限り非常に難行した。

出土した遺物は縄文時代晚期以降のものであり、量的には古墳時代と思われる土器が最も多い。遺物の中には、骨角器・瓦・石器・玉類などが含まれており、土器と共に遺存状態は極めて良好であった。

1 おもなトレンチと出土遺物

16トレンチ（第3・4・5図、図版1・3・5）

星代遺跡群のはば中央北寄りに設定したトレンチである。調査地点の北側15mほどで自然堤防は終り、自然堤防内側の水田地帯となる。したがって地形は総体的にやや北傾斜となっている。

20~30cmほどの耕作土を掘り下げるとき褐色土が40cmほど堆積しており、カマドの上部がこの土層中で検出されることから、住居址覆土の上層にあるものと思われる。さらにその下には暗褐色土の堆積が25cmほど見られ、黄褐色土の床面となる。分布調査であるため拡張を行っておらず、住居址の規模は不明である。カマドは粘土製で、石などの利用は見られない。ただ土器の中には厚く焼土が付着している甕なども見られ、カマドに使用されていた可能性もある。火床中央には土製の支脚が立てられていた。またカマドの下には火床に合わせたように深さ30cmほどの掘り込みが見られる。カマドの北側に1ヶ所、南側に2ヶ所、不整形で深さが10~20cmほどの掘り込みがある。いずれも遺物の出土状態から見て、住居址に付属するものと思われる。しかし東側に見られる2ヶ所の掘り込みについては、住居址との関係は定かでない。

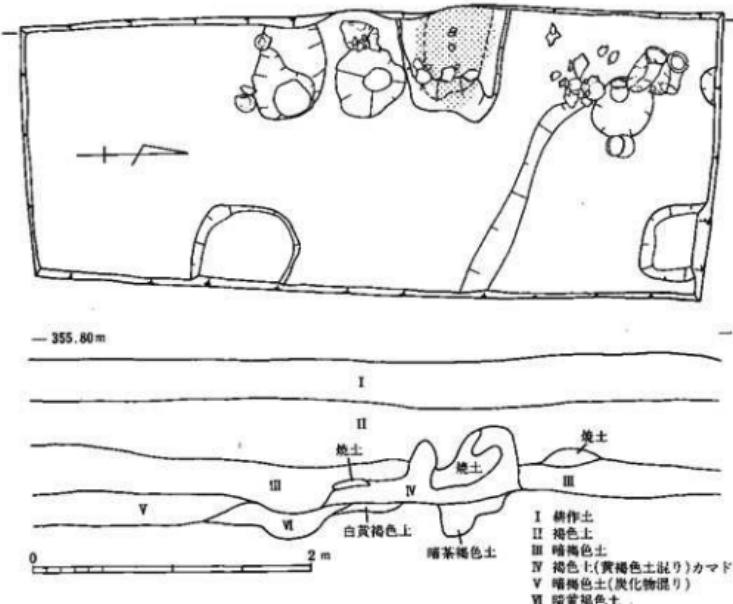
ほぼ完形に復元できる土器が多数出土している。坏はいずれも内面黒色処理が施されており、4を除き全体部下端に段を有している。5はカマド内より出土した高坏で坏部に対して脚部が小さい。口縁部は短かく立ちあがり外反している。6~8は口径13~14cmの甕で、いずれもハケによって調整されているが、器高・口縁部の作りはそれぞれ異なっている。特に8はつくりが荒く、外面のハケはケズリに近いもので、器面の凹凸も激しい。9~13は長胴の甕で、最大径を胴部中位付近に持つ。9・10・13はやや肥大した頸部から外反しながら薄くなり、口唇部に至るのに対し、11は胴部から「くの字」状に屈曲し、そのまま口縁部となっている。9・11の器面にはハケ

の痕跡が認められるがいずれも荒い調整であり、ていねいな作りとはいえない。壺である14は球形の胴部から直立した口縁部が外反して口縁端部となる。器面はハケの後、荒いミガキによって整えられている。15はカマド中央に立てられていた土製の支脚で、円柱状を呈している。穿孔などはない。16は指頭痕を顕著に残した手捏であり、17は土器片を利用した土製円盤である。小形の壺と思われる破片が利用されており、周囲は研磨されている。18~21の玉類はいずれもカマド内より出土したもので、18・19が滑石製の勾玉、20が滑石製の白玉、21が練玉である。22は骨製品で一端には尖らせようと削った痕跡が認められるが、完成はしていない。

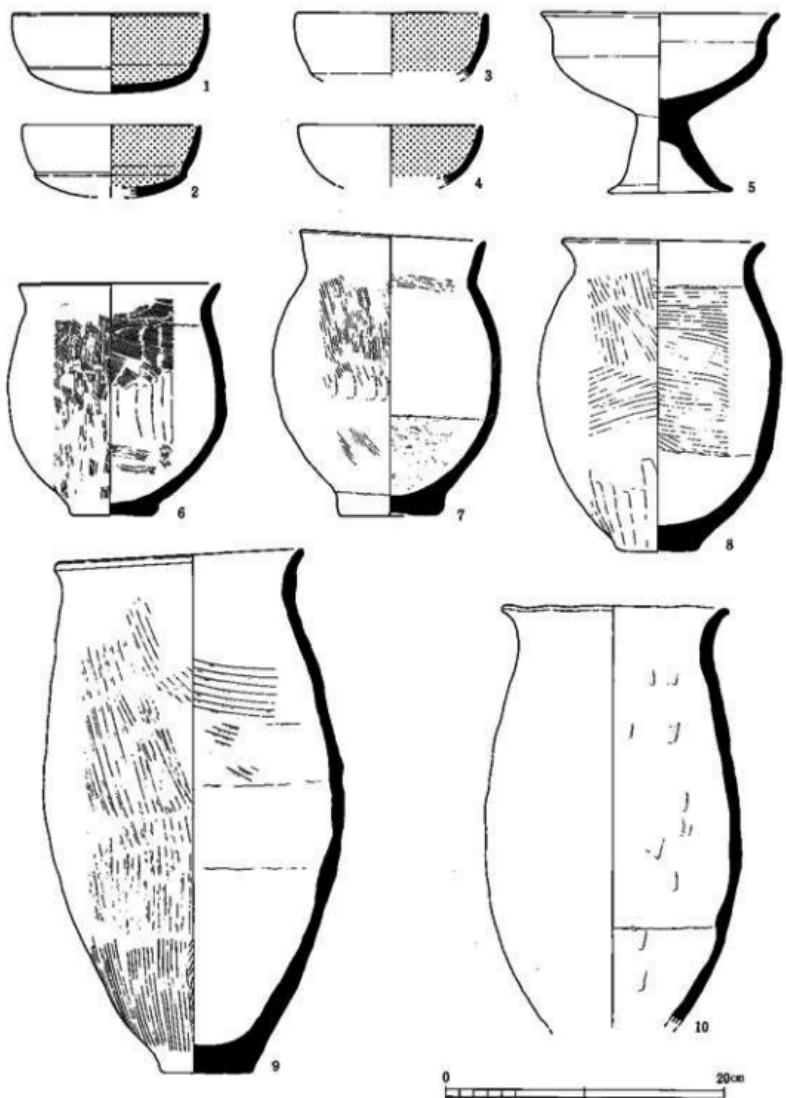
19トレンチ（第6・7図、図版4）

屋代遺跡群の東側に設定したトレンチで、北側10mほどで自然堤防は終りとなる。畠地として利用されており、2mほどの比高で水田地帯となっている。

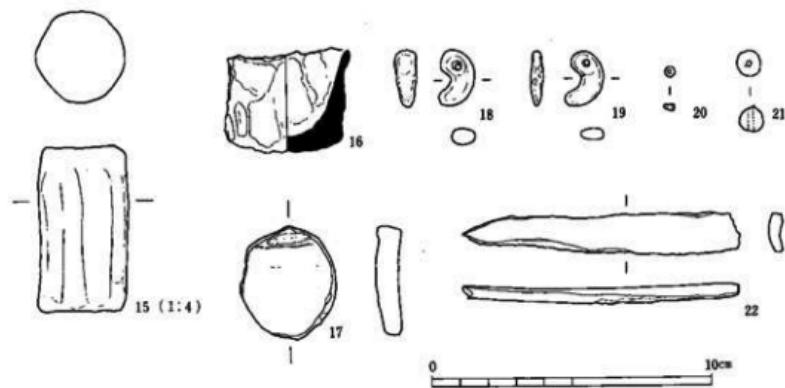
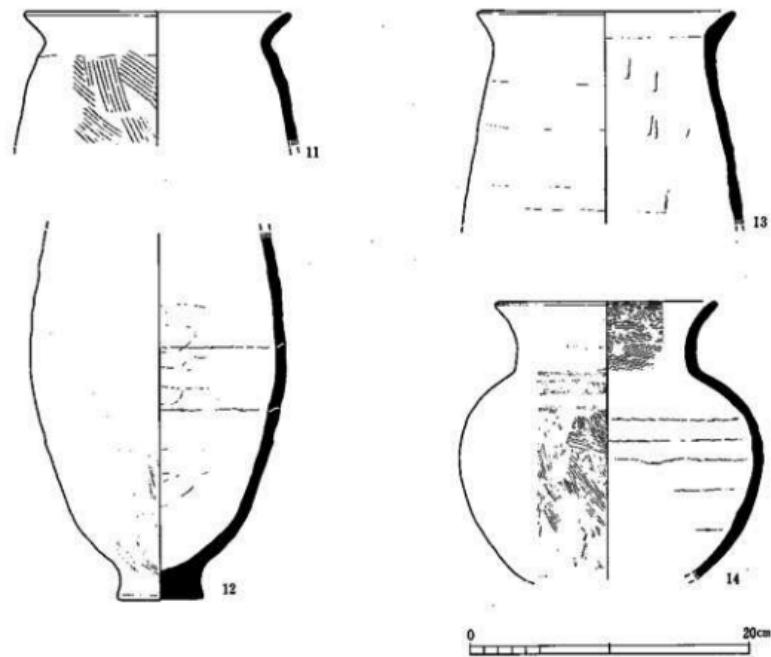
15~20cmの耕作土を掘り下げるとき褐色土となり、この層を15cmほど掘り下げるとき1号住居址のカマドの天井部に当たる石が検出された。さらに25cmほど掘り下げるとき黒褐色土と変り、ここで2号住居址が検出できる。さらにこの黒色土を45cmほど掘り下げるとき、黄褐色土を叩き締めた



第3図 16トレンチ



第4図 16トレンチ出土遺物

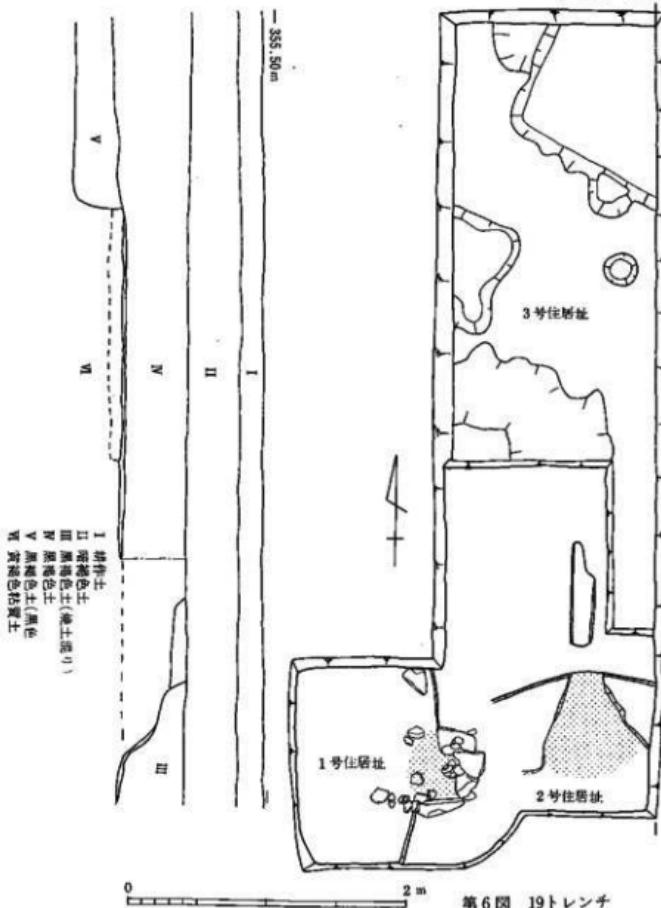


第5図 16トレンチ出土遺物

3号住居址の床となる。

1号住居址 トレンチの南西隅より検出されたためトレンチを西側へ1mほど拡張したが、2号あるいは3号住居址の覆土を掘って構築されているため確認が難しく、床面はカマド部分の焼土から検出していった。カマドは東壁より張り出した形で、石を多用して作られている。残存する壁高は15cmほどであった。

2号住居址 北壁に粘土製のカマドが作られており、壁面より1mほどの溝が北へ直線的に延びている。1号住居址同様、3号住居址を掘り込んで作られているため、遺構の検出は難しい。



第6図 19トレンチ

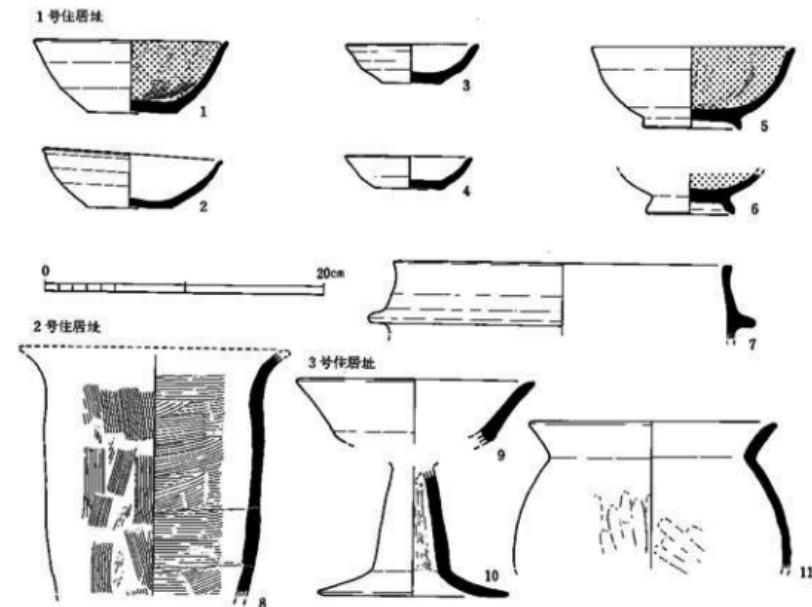
床面から検出面までは50cmほどを測る。

3号住居址 床面のみの検出であり、規模は不明である。良く叩き締められた床で、移植ゴテも通さない程であった。ただ北側ではこの床面が切られ35cmほど掘り込まれているので、他に住居址が存在するのかもしれない。

1号住居址より出土した遺物は大半が土器である。1～6は環で、1と高台の付く5・6には内面黒色処理が施されており、1と5には放射状の暗文が見られる。3・4は口径が10cmにも満たない小形品で、ミガキ等をまったく施しておらず、いわゆるカワラケ状を呈している。7は羽釜の鋸から口縁部にかけての破片である。口縁部・鋸は共にていねいな横ナデが施されており、口唇部は平坦に仕上げられている。

2号住居址の遺物としては、口縁部・底部を共に欠いた長胴甕の8がある。器面はハケによって調整されているが、その工具は内面と外面では異なっている。

3号住居址からは、高環である9・10と甕の11が出土している。高環は環部に稜を有し、脚は裾の部分が大きく開いている。甕は球形の胴部より「くの字」状に外反し、口縁部となる。器面は荒いナデによって整えられている。



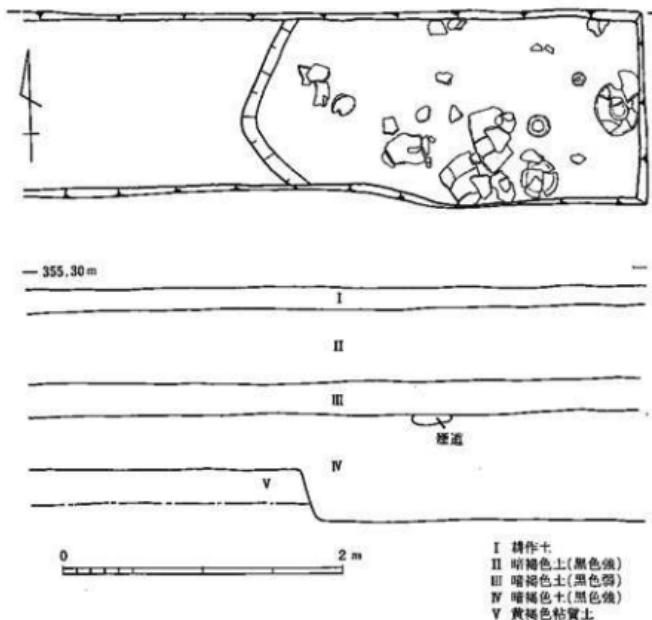
第7図 19トレンチ出土遺物

25トレンチ（第8・9図、図版2・4）

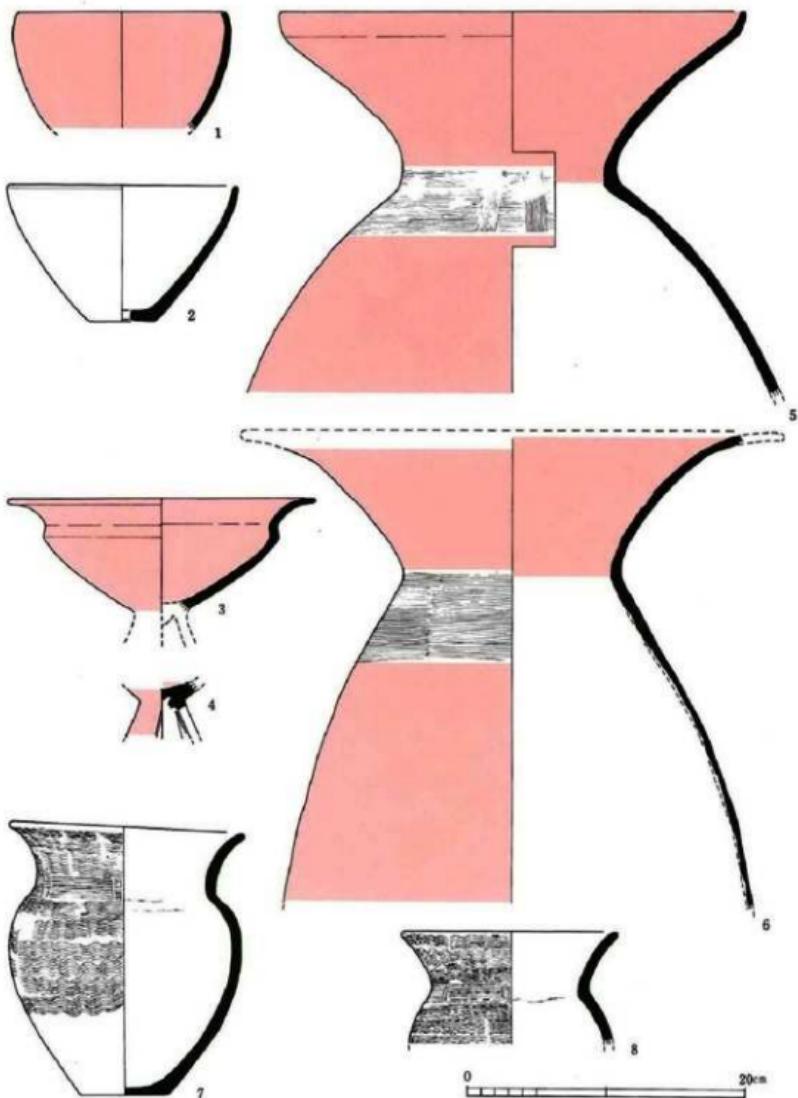
屋代遺跡群の東側、雨宮の集落内に設定したトレンチである。畑地として利用されていた所であり、水田面とは1.2mほどの比高を持つ。

15cmほどの耕作土を掘り下げる、第II層となる暗褐色土が50cmほど堆積しており、その下にはII層と比較するとやや黒色味の弱い暗褐色土が25cmほど堆積している。この土を取り除くとII層に良く似た土層となり、南側より煙道が延びている。出土遺物から、南側には平安時代の住居址がこのIII層を掘り込んで作られているものと思われる。III層を40cmほど掘り下げる、黄褐色粘質土となり、最下部の遺構検出が可能となる。したがって最下部の遺構確認には130cmほどの掘り下げが必要となる。この黄褐色土を掘り込んで、弥生時代後期の住居址が検出されている。検出されたのは住居址の西側隅であるが、規模などは調査の性格上確認していない。壁高は35cmほどであり、床面は顯著であった。

遺物は、上層より平安時代の土器も検出されているが、住居址の床面より出土した箱清水式土器の一群が主体をなす。1は内外面とも赤色塗彩された土器で、底部を欠いているが鉢と思われ



第8図 25トレンチ



第9図 25トレンチ出土遺物

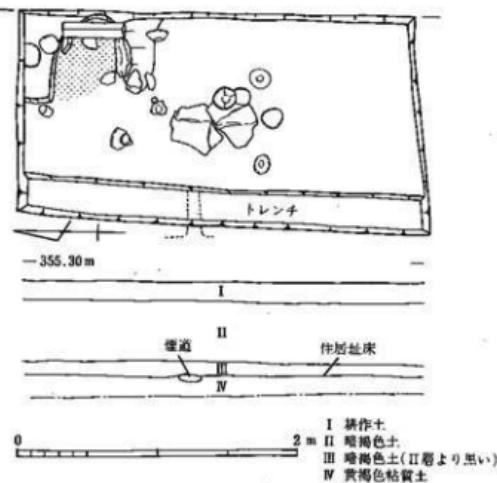
る。2は底部に一孔が穿たれた完形の壺で、内外面はていねいなヘラミガキで整えられている。底部から直線的に外開した体部は、内弯して口唇部となる。3・4は赤色塗彩が施された高杯である。壺部である3はやや弯曲しながら外開し、短かく立ち上がった後大きく外反し、口縁部となる。4には、三角形と思われる透しが3ヶ所に見られる。5・6は大形の壺で、口縁部を残している5は口径33cmを測り、胴部最大径は40cm前後となる。共に外面は櫛描文の部分を除き全面に、また内面には頸部まで赤色塗彩が施されている。口縁部はラッパ状に開き、端部が立ち上がる5と、そのまま口唇部に至ると思われる6とがある。胴部は5が球形に近いのに対し、6は長胴となっている。頸部には櫛描T字文と平行線文が施されている。7・8は中形の壺で、口径は16.8cmと15.5cmを測る。共に頸部には二箇止め籠状文を持っており、口縁部及び胴上半部には櫛描波状文が施されている。頸部より外反した口縁部は、そのまま丸く仕上げられた口唇部に至る。

44トレンチ（第10・11図、図版2・4・5）

屋代遺跡群のやや東寄りに設定したトレンチで、自然堤防上面とは約0.6mの比高がある。現在は水田として利用されているが、昭和44年に実施された場所整備の際、畑地から削平され転換された地域である。これに伴って実施された下条遺跡の発掘調査地点は、このトレンチの西側10m付近と思われる。

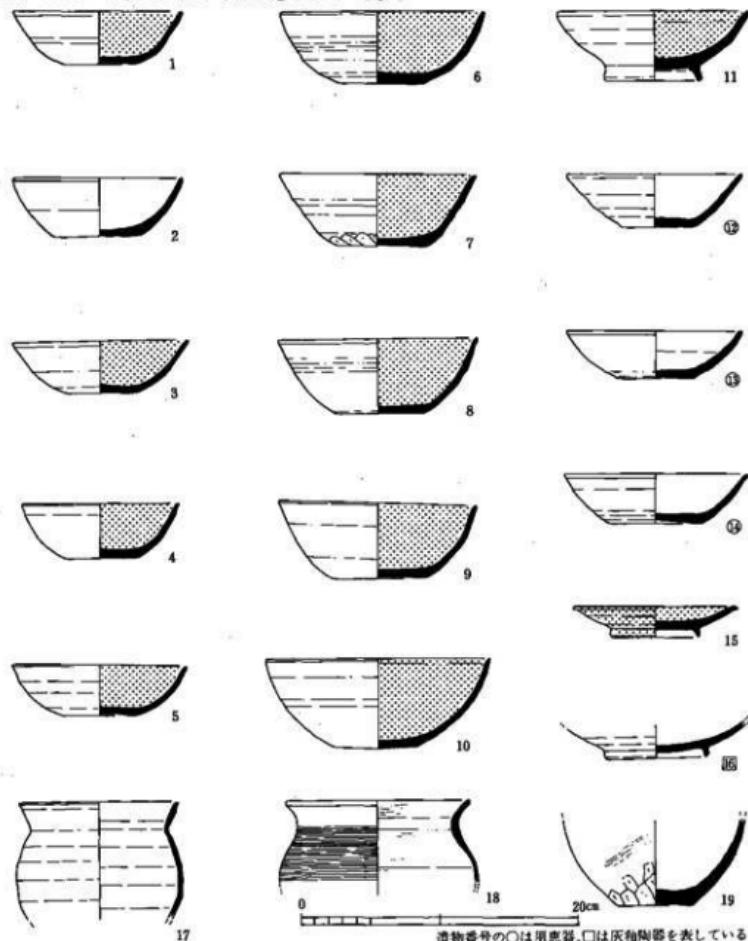
上部が削平されているため、15cmほどの耕作土を取り除くと黄褐色粘質土の遺構検出面となる。トレンチの東壁はそのまま住居址の東壁となっており、その壁に面して裾花凝灰岩の切り石を利用した石組粘土製のカマドが検出された。良く締まった床面からは、散在してかなりの遺物が出土している。床面の下には暗褐色土が10cmほどあり、黄褐色粘質土となる。この部分より煙道が検出されていることから、西側にはこの住居址より古い住居址が存在するものと思われる。

遺物は多い。1～5は口径11～12.5cmほどの壺で、2を除き内面は黒色処理されている。底部及び体部下端には糸切りの後、回転ヘラケズリを施している。口径14～16cmとなる大形の6～10も、内面には黒色処理が



第10図 44トレンチ

施されているが、底部は6を除き糸切り痕をそのまま残している。7の体部下端には荒い手持ちのヘラケズリが見られる。12~14は口径12.5~13cmほどの須恵器坏であり、いずれも底径が小さく、外傾の大きなものである。15は内外面とも黒色処理された土師器の皿である。16は灰陶陶器の塊で、輪はハケで塗られ、高台の作りもていねいである。17~19は小形甕で、ロクロによって成形されている。18にはカキ目が施されている。



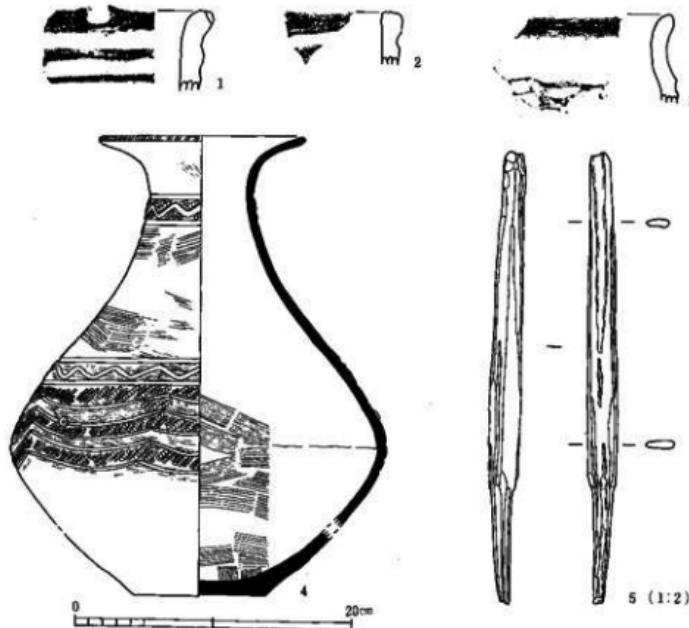
遺物番号の○は須恵器、□は灰陶陶器を表している

第11図 44トレンチ出土遺物

2 その他の出土遺物（第12図・図版5）

今回の調査により出土した遺物のうち最も古いと思われる土器は、19・20トレンチより出土した縄文時代晩期の土器である。1・2はミガキが施された口縁部破片で、幅広の沈線が巡らされており、1の口唇部には小突起が見られる。3もミガキが施されており、刺突を施した隆帯が巡っている。おそらく水式土器に比定されるものと思われる。4は弥生時代中期、栗林式土器の壺である。3トレンチから出土したものであるが、ほかにも数トレンチより同時期の土器が出土している。器面はハケ調整の後軽いミガキが行われており、胸部はソロバン玉状を呈し、最大径を胴部下位に持つ。口縁部はラップ状に外反し、口唇部は面取りされ、縄文が施されている。頸部及び胴部上半には2条の平行沈線が巡らされ、中を鋸齒文で埋めている。また胴部中位には5本の連弧文が描かれ、1条おきに縄文が施されており、ボタン状の貼付も見られる。

5は20トレンチより出土した骨角製鐵である。全長16.2cm、幅1.1cmを測り、長さ4.5cmほどの茎が作り出されている。先端は細かな削りが幾筋も施されているが、尖らせる所までは至っておらず、未完成品である。



第12図 その他の出土遺物

トレンチ No.	遺構	時代	標高(m)	包含層まで の深さ (cm)	備考
1	ピット	古墳～平安	357.0	90	
2	溝 掘立柱建物址	奈良～平安	356.9	70	
3	弥生中期住居址	弥生中期～平安	356.5	80	
4	溝	奈良～平安	356.5	170	
5	平安住居址	奈良～平安	356.7	70	
6	平安住居址	奈良～平安	356.7	70	
7	水田址 平安住居址 2棟	奈良～平安	356.3	80	鉢状の遺構あり
8	住居址	弥生中期～平安	356.3	80	
9	ピット	古墳～平安	356.7	70	
10	掘立柱建物址 ?	弥生中期 奈良～平安	356.7	80	
11	溝・住居址	弥生中期 古墳～平安	356.3	120	
12	大溝・井戸	古墳～中世 ?	356.1	120	
13	平安住居址 2棟	奈良～平安	356.0	70	
14	平安住居址	弥生後期～平安	355.8	80	
15	溝・井戸	弥生後期～平安	355.6	100	
16	古墳後期住居址	弥生後期～平安	355.7	50	カマド検出・滑石製勾玉出土 遺物多
17	溝・住居址	古墳～平安	355.9	90	カマド検出
18	住居址	弥生中期 古墳～平安	355.8	70	住居址が複数切り合っているらしい 遺物多
19	古墳住居址 2棟 平安住居址	弥生中期～平安	355.4	50	
20	古墳住居址 2棟	弥生中期～平安	355.8	90	骨角製錬出土
21	平安住居址	弥生中期～平安	355.8	90	
22	古墳住居址	弥生後期～平安	355.2	110	カマド検出・瓦出土
23	遺構なし	遺物なし	353.5		

トレンチ No.	遺構	時代	標高(m)	包含層まで の深さ (cm)	備考
24	遺構なし	遺物なし	354.1		
25	弥生後期住居址 平安住居址	弥生後期 奈良～平安	355.2	100	平安住居址煙道のみ検出
26	水田址	奈良～平安	355.0	90	
27	住居址	弥生後期～平安	356.5	100	
28	未調査				
29	未調査				
30	水田址	奈良～平安	354.3	60	遺物少
31	井戸址・水田址	弥生後期 奈良～中世?	356.9	100	
32	遺構なし		354.9		
33	水田址	弥生後期 平安	354.4	60	
34	遺構なし	奈良～平安	354.4		
35	遺構なし		354.5		
36	水田址	奈良～平安	356.9	170	遺物少
37	遺構なし		354.6		
38	水田址	奈良～平安	354.6	50	遺物少
39	水田址	奈良～平安	354.3	50	遺物少
40	遺構なし		355.1		搅乱層より弥生後期の 土器出土
41	古墳住居址	弥生後期 古墳～平安	355.5	90	
42	住居址?	奈良～平安	354.9	20	
43	住居址?	古墳～平安	355.8	70	
44	平安住居址 2棟	弥生後期～平安	355.2	20	カマド検出 1棟は煙道のみ検出
45	水田址	奈良～平安	355.9	60	遺物少
46	水田址	奈良～平安	355.9	70	遺物少

IV まとめ

幾度かの発掘調査により、屋代遺跡群・更埴条里水田址の重要性はすでに明らかとされているが、今回の分布調査によって得られた成果もまた極めて大きい。

屋代遺跡群では、かつて城ノ内遺跡あるいは生仁遺跡より縄文時代の遺物が出土したと報告されているが、その出土については明記されておらず、その後の調査では、縄文時代の遺物はまったく出土していなかった。そのため自然堤防上における屋代遺跡群の成立については明らかでなく、現在調査を行っていない黄褐色粘質土層を掘り下げる必要性があるかどうかが問題となっていた。この黄褐色粘質土は、善光寺平南部の千曲川流域に広く分布するもので、場所によっては厚さ数mにも達している。今回の調査で、2ヶ所のトレンチから、黄褐色粘質土層の上部に堆積した暗褐色土層中より、縄文時代晚期の水Ⅰ式と思われる土器片が出土していることから、少なくとも屋代遺跡群の成立はこの時代までは遡ることが明らかとなった。このことから、水田址についても黄褐色粘質土を掘り下げて調査する必要はなくなった。

居住域の変遷では、各時代ごとに異なりを示している。弥生時代の遺物の出土を見ると、その広がりはほぼ遺跡群全体に広がっているが、その出土量は明確に一定の地域を示している。それは東側の21トレンチ付近と西側の3トレンチ付近である。この傾向は弥生時代中期に限るとさらに顕著となる。自然堤防も中央部がくびれた形状を示しており、現在東へと流れ沢山川に合流している五十里川は、かつてこのくびれた部分で自然堤防を切り、千曲川へと流れていると考えられる。また自然堤防の北側に偏る傾向も見られ、3トレンチで検出された弥生中期の住居址は、北側が千曲川の浸食によってなくなっていた。古墳時代になると東西に分かれることはなくなり、自然堤防上は一つの遺跡群としてつながる。ただ弥生時代同様、自然堤防の北側に偏る傾向は見られる。奈良時代以降になると北側に偏る傾向も見られなくなり、時期的な移動はあるものの、ほぼ全域に広がっている。この北側に偏る傾向は自然堤防の変化によるもので、弥生時代以前は現在の自然堤防よりやや北に位置していたものが、その後南下して奈良時代ごろ現在の自然堤防が形成されたものと思われる。

水田址については、古くからその存在が知られていたいわゆる更埴条里水田址の部分の調査を自然堤防（居住域）との接点付近にとどめ、自然堤防の北側の水田址に主眼を置いて調査を実施した。この部分は昭和58年に実施した立会調査の際、初めて水田址の存在が明らかとなった地域であり、その実態については不明な点が多くあった。今回の調査では、10ヶ所のトレンチを設定し、その広がり・厚さ等について、プラント・オパールの分析も含め実施した。更埴条里水田址と居住域との接点は、昭和44年に行われたほ場整備以前の水田と畑地の境にほとんど一致しており、今日とほとんど変化がないことが確認された。主眼を置いた自然堤防北側の調査では、34・37トレンチでは水田址は確認されておらず、それほど大きな広がりを持っていないものと思われる。

のことから水田址の北限は、部分的に張り出しがあるものの、自然堤防の縁よりほぼ70mほどにあると考えられる。また水田址は3面以上が砂層をはさんで観察でき、1面だけの検出である自然堤防の南側とは、大きな違いを示している。この3面の水田址が属する時代については明らかにできなかったが、水田土壤はいずれも薄く、プラント・オバールの分析結果を見ても、その検出量は多いとはいえない。したがって各水田址の使用期間は短かく、1面しか検出されない自然堤防南側の水田址使用期間内におさまるものと思われる。さらに自然堤防をはさんだ両水田址の畦畔がどのような関係にあるのか究明できればと期待したが、自然堤防北側の水田址で畦畔を検出することはできなかった。

これらの調査結果から考えれば、中央自動車道長野線の予定地域は、高畠の一部を除いて水田址が存在する可能性は少ないと思われる。それにしても、水田址は自然堤防の周辺に広がっており、かなりの灌漑施設が必要であったと考えられる。

今回の調査ではまた、屋代寺に関係した遺構が検出できれば、とも考え、20・21・25・27のトレンチを設定したが、遺構の検出には至らなかった。しかし古瓦については21・22・41トレンチより出土している。いずれも昭和32年に建物跡を検出した部分の北西にあたる所であり、今後その広がりについても究明していきたい。

最後に今後の調査の進め方についてであるが、屋代遺跡群は東西1.6km、南北0.6kmにわたって集落址が広がっており、ほとんど切れる所がない。したがって、グリッドあるいはトレンチの設定方法が大きな問題となる。調査は長い年月の中で進められていくわけであり、その調査が統一されたグリッド配置によって進めることが求められる。更埴市では現在測量の基点を国家座標に求めているが、この国家座標軸に合わせ、遺跡群を総括したグリッドを設定することが必要である。このことは、水田址の調査についてもまったく同様であり、調査主体が変わって同じでなければならない。

最初にも記したように、今回の調査で屋代遺跡群の成立は、少なくとも縄文時代晚期まで遡ることが明らかとなったが、この時期にはすでにかなりの自然堤防が形成されており、遺跡の存在はさらに遡ると思われ、今後自然堤防の成立時期と共に究明していくことが必要である。

本調査の実施にあたっては、調査を快く領掌くださった地主の方々、雪の降る12月まで作業に参加くださった作業員のみなさまに心からなる謝意を表し、今後の埋蔵文化財保護に対する御理解と御協力を願うところであります。

V プラント・オパール分析調査報告

古 環 境 研 究 所

1 はじめに

この調査はプラント・オパール分析を用いて、埋蔵水田址の層位と分布範囲の探査を試みたものである。以下に、調査の結果を報告する。

2 試 料

- (1)採取年月日 昭和62年12月3日
- (2)採取地点 30・35・37・38・39・45・46の各地点である。ここに深さ2mのトレンチが掘削された。
- (3)層 序 地点間の間隔が広く、土層も不安定であったため、基本層序は設定されなかった。試料名は各トレンチにおいて層相の変化ごとに付けた番号であり、地点間の対応関係を示したものではない。
- (4)採取方法 容量50ccの採土管を用いて各層ごとに5~10cm間隔で土壤試料を採取した。
- (5)試 料 数 計86資料を採取し、これらすべてについて分析を行った。

3 分析結果

調査の主目的が水田址の調査であるため、イネ、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ族（ススキなど）が含まれる）、キビ族（ヒエなどが含まれる）の主要な5分類群について同定・定量を行った。

図1に、イネのプラント・オパールの出現状況を示した。

4 考察

水田址の探査を行う場合、イネのプラント・オパールが試料1gあたり、およそ5,000個以上検出されたときに、稻作の行われた可能性が高いと判断している。またその層にプラント・オパール密度のピークが認められれば、後代のものが土層から混入した危険性は考えにくくなり、稻作跡の可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて、稻作の可能性について検討を行った。

30トレンチでは、5層以外のすべての層でイネのプラント・オパールが検出された。このうち1層は、現在もしくは最近の水田耕作に由来するものと考えられる。3層では密度が7,600個/gと高く、明らかなピークが認められた。また8層上部では密度は4,800個/gとやや低いものの、明らかにピークが認められた。したがってこれらの層で稻作が行われた可能性は高いと考えられる。

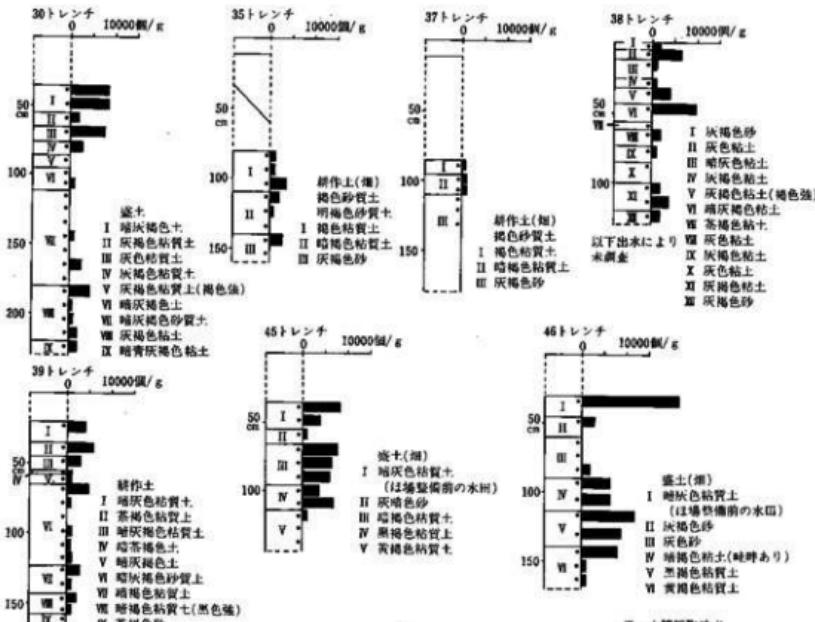
上記以外の層は密度が低いことから、稻作が行われていた可能性は考えられるものの、上層もしくは他所からの混入の危険性も否定できない。特に6層は密度が900個/gと微量であることから、稻作が行われた可能性は考えにくい。

他の地点についても同様に検討を行い、稻作の可能性を4段階に区分して次表に示した。この

うち○印はイネのプラント・オパール密度がおよそ5,000個/g以上と高く、またピークが認められることによって稻作の行われた可能性が高いと判断されるところである。△印は密度1,000～5,000個/g未満と比較的低く、稻作の行われた可能性は考えられるものの他所からの混入の危険性も否定できないところである。▲印は密度がおよそ1,000個/g未満と微量であり、稻作の行われた可能性は考えにくいところである。×印はイネのプラント・オパールが検出されなかつたところである。

各トレンチ・各層位における稲作の可能性

以上のように、30トレンチの1・3・8層、38トレンチの3・6・7層、39トレンチの2・3・7層上部、45トレンチの1・3・4層、46トレンチの1・4・5・6層では稻作が行われていた可能性が高い。





調査風景



プラント・オバール分析調査



16トレンチ

図版2

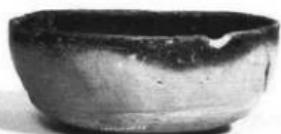


25トレンチ



44トレンチ

16 トレンチ出土遺物



1



5



14



7



9



10

図版4

19トレンチ出土遺物

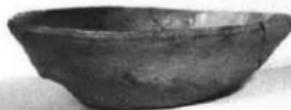


1



5

25トレンチ出土遺物



3



4



2



5



7

44トレンチ出土遺物



2



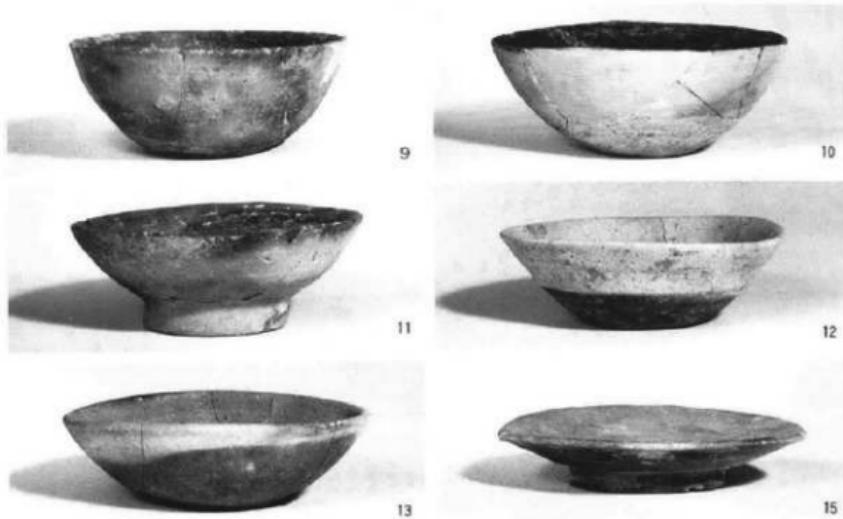
3



6



8



16トレンチ出土玉類



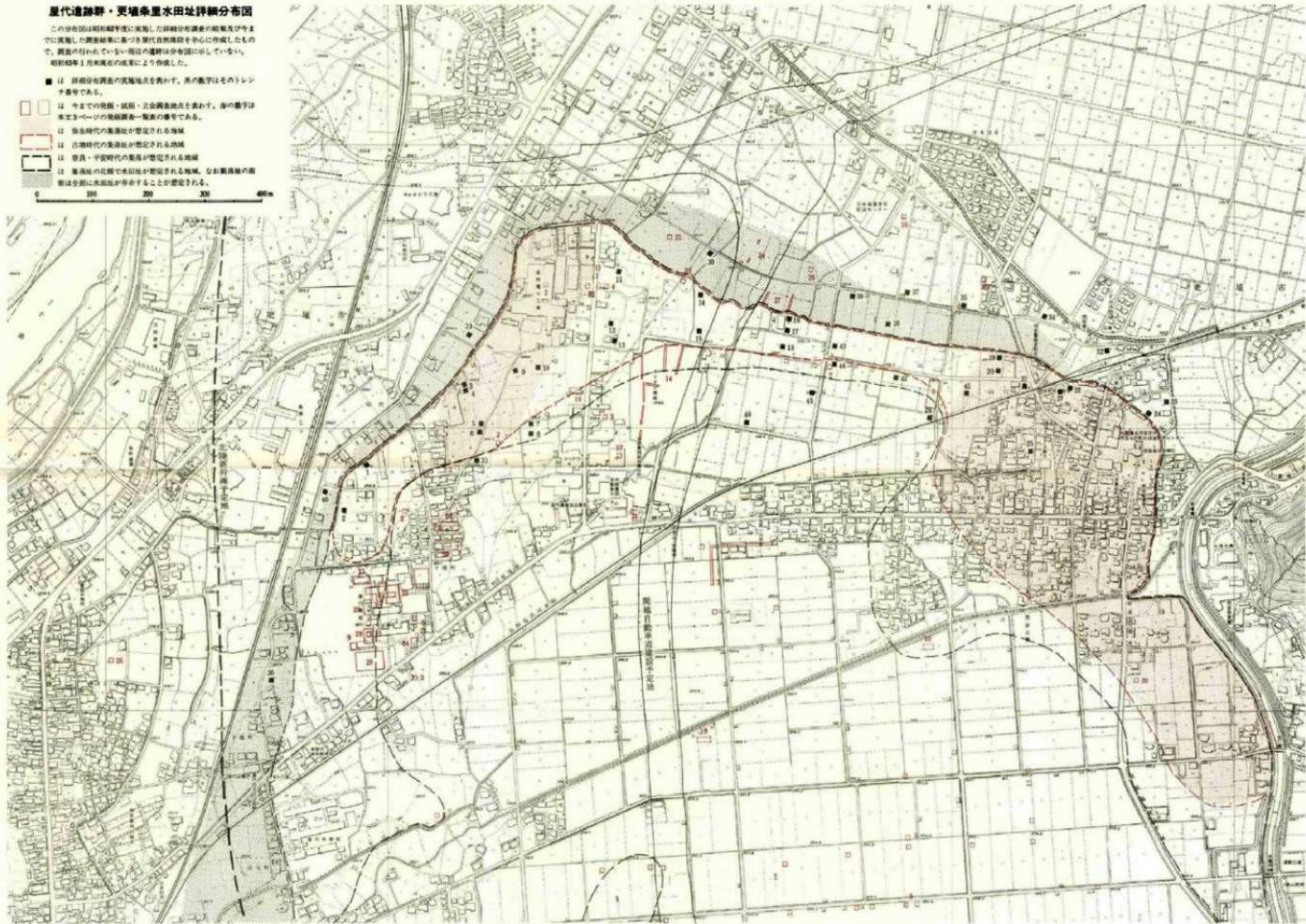
20トレンチ出土骨角製鏃



歷代遺跡群・更埴条里水田址詳細分布圖

この分布図は昭和5年半度に実施した群査分布調査の結果及び今までに実施した調査結果に基づき累代自然選択を中心と作成したもので、調査の行われていない現況の選擇は分布図に示していない。
昭和5年1月末現在の結果により作成した。

- は詳細な発生地を示す。後の数字はそのトレーラ番号である。
 - は今までの発現・試験・立会査定地点を表す。前の数字は本文3ページの発現原団一覧表の番号である。
 - は発生時代の集落図が想定される地域
 - は古墳時代の集落図が想定される地域
 - は奈良・平安時代の集落図が想定される地域
 - は集落図の化粧版で田畠が想定される地域。なお農耕地の範囲全面で水田地帯があることを示す場合に用いられる。



屋代遺跡群・更埴条里水田址詳細分布調査報告書

発行日 昭和63年3月31日

編集 更埴市教育委員会

発行

〒387 長野県更埴市大字杭瀬下752-2番地

T E L (0262) 73-2791

印刷 信毎書籍印刷機

〒380 長野市西和田470

T E L (0262) 43-2105